

DATA FILE



単斜晶系

名 前	LEPIDOLITE (レピドライト) / リシア雲母
化学組成	$K(Li,Al)_3(Si,Al)_4O_{10}F_2$
色	無色、白色、ピンク色、紫色など
光 沢	真珠光沢
蛍 光	なし
条 痕	白色
劈 開	完全
断 口	不規則
硬 度	2.5 ~ 3.5
比 重	2.8 ~ 2.9

リシア雲母

LEPIDOLITE

リチウム、カリウム、アルミニウム、ケイ素、酸素、フッ素のほかに、微量なルビジウムを含むことがある。

母岩とともに産出したピンク色のリシア雲母。

リチウムを多量に含んだ雲母の一種で、薄い板状の集合体であられることが多い。



「リシア雲母」とは、独立した鉱物を指すのではなく、トリリシオ雲母とポリリシオ雲母の総称。

真珠のような光沢を持ち、素焼きの陶板にこすりつけると白色の条痕を残す。

劈開は一方に完全で、ハンマーでたたくと不規則な断口を示す。

英名の「レピドライト」は、ギリシャ語で「鱗」を意味する「レピス」にちなんで名づけられた。

トリリシオ雲母とポリリシオ雲母の総称

「リシア雲母」は、独立した鉱物名ではなく、トリリシオ雲母 $[KLi_2AlSi_4O_{10}F_2]$ とポリリシオ雲母 $[KLi_{1.5}Al_{1.5}Si_3O_{10}F_2]$ の総称として用いられる。含まれるリチウム、アルミニウム、ケイ素の量が変化し、リチウムとケイ素が多くなったものがトリリシオ雲母、アルミニウムが多くなったものがポリリシオ雲母だ。なお、「リシア雲母」という呼称以外にも、主にピンク色や紫色がかった結晶であられることから「紅雲母」といわれたり、鱗のように小さな結晶が集合していることから「鱗雲母」と呼ばれることもある。

▶リシア雲母の結晶集合体。



リ リ シア 雲 母



▲ピンク色のリシア雲母。
ブラジル産。

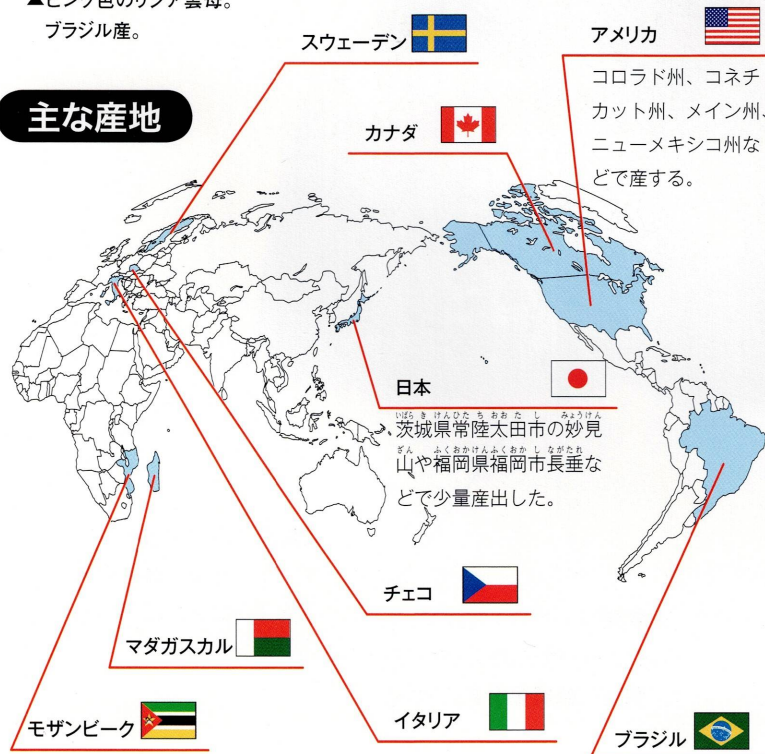
リチウムの主要な原料

リシア雲母は、火成岩のなかでも特に花崗岩ペグマタイトのような酸性の火成岩中に生成する。共生鉱物のリシア輝石やリシア電気石などもリチウムを含む鉱物だが、リシア雲母はリチウムの含有量が多く、最も普通に産出するため、リチウムの主要な原料として利用されている。リチウムは主に電池などの製造に利用される金属元素で、その産業的用途は幅広い。



▲ブラジルで産出したリシア雲母を拡大したもの。雲母グループの特徴である薄片状の外観が観察できる。

主な産地



ルビジウムによる年代測定

リシア雲母の中に微量に含まれているルビジウム 87 という放射性同位元素は、原子核の崩壊などを経て、ストロンチウム 87 に変わる性質を持っている。この性質を利用することで、リシア雲母が含まれる岩石の生成年代を測定する方法を「ルビジウム - ストロンチウム法」といい、広義で「放射年代測定」に属する。